

第12回大会 盛会のうちに終了!

キリスト教礼拝音楽学会 第12回大会報告

第12回大会を振り返って

吉田 幸弘

2001年に発足した〈キリスト教礼拝音楽学会〉の大会も12回目を迎えた。東京以外では、第8回大会が大阪の東梅田教会、第10回大会が広島流川教会で行われ、東京以外での隔年開催が定着してきた。今回は九州は博多、西南学院が会場である。

午前10時、総合司会を務める伊東辰彦氏が、〈開会宣言〉を担当される金澤会長を紹介。金澤会長はいつもの若々しい声で、当学会は古澤前会長のヘッドクォーターである西南学院に乗り込んできたが、キャンパスの緑に圧倒される、と一言。それを受けた古澤前会長は〈挨拶〉として、母校西南学院大学の南側を通る「よかトピア通り」はその昔海岸線だったこと、キャンパス内には「聖書植物園」と称して聖書にちなんだ植物が植えられていることを披露。

雰囲気が盛り上がり、午前中最初のプログラム〈研究発表〉として、カトリック広島教区観音町教会の聖歌隊指揮者である林隆一郎氏が、「礼拝における創作と実践——カトリックにおける典礼音楽とオルガン」と題して30分の発表を行った。背景知識としてグレゴリオ聖歌やミサ曲、レクイエムなどラテン語の教会音楽と第二バチカン公会議について述べた後、本論である「ローマ・ミサ典礼書の総則」（暫定版）に基づく現行の日本のミサの骨組みについて考察。ミサのプログラムを追いながら具体的に説明を加え、「ミサにおけるオルガン」と「聖歌隊の役割について」を経て、最後に「今、求められているもの」として、グレゴリオ聖歌の精神を模範とする日本典礼聖歌の創作が求められていると締めくくった。林氏は、中高生の頃に第二バチカン公会議が行われた世代であり、説明の合間にグレゴリオ聖歌を朗々と口ずさむ姿には、教会音楽実践者と

しての年輪を感じさせた。

この後〈質疑応答〉が行われ、ヘンゼラー／新垣、及び地元福岡の三谷／橋本の各氏より質問や意見が出された。その中心点は日本典礼聖歌の現状に対する問題意識であり、新垣氏の凝縮された認識や、オルガニストである橋本氏による司祭と会衆双方に対する意見は座を盛り上げたが、予定の倍の20分になったところで司会が「核心に迫って参りましたがお時間です」と打ち切らざるを得ず、早くも学会らしさが顔を出した。

10分の休憩をはさみ、古澤前会長が50分にわたり「礼拝における讃美と音楽」と題する講演を行った。当学会発足当時のことを思い起こした後、ご自身の背景として1965年以降3回渡英して教会音楽を密に学んだことを具体的に述べ、本論の「礼拝とは何か」に話を進める。礼拝における会衆参加の重要性やV・ウィリアムズによる1906年以降の英国賛美歌集、日本での『讃美歌21』に至る歌集に言及し、G・レオンハルトの生き方に共鳴していることなどを表明され、講演を締めくくった。

これに引き続き、西南学院大学音楽主事である安積道也氏によるオルガン演奏が行われた。当日の会場であるドージャー記念館講堂に故辻宏氏が2009年建造した、当時九州では最大のメカニカル式の楽器である。1987年の初代オルガン以降の歴史も併せた楽器の紹介の後、G・ベームのパーティータ「おお我が魂よ、大いに喜び」とバッハのプレリュード・ト長調BWV541がみずみずしく明瞭な音色で奏でられたが、時間的にも思わず食欲を覚え、囁かずも、聴覚と味覚の「共感覚」を味った次第である。

午前中最後のプログラムは総会である。会長挨拶の

後、出席 26 名、委任状 18 名の計 44 名で会員数 78 名の 4 分の 1 を超えていることが報告され、議長金澤氏が副議長伊東氏と書記佐々木悠氏を任命。第 1 号議案(2011 年度活動報告／収支決算)と第 2 号議案(2012 年度事業計画／収支予算案)は、都合で欠席された佐々木しのぶ氏に代わり手代木氏が活動報告を行い、拍手で承認された。質疑応答では、カトリックとプロテスタントの有機的な結びつきや、事務局員の交通費支出、メールを利用した郵送費削減などの提案があった(終了は 12 時 50 分)。

昼食は、正門をはさんだ東側の大学院の敷地にある「西南クロス・プラザ」のカフェテリアで楽しむことができた。博多市民も気軽に訪れる「街角の学食」であり、改めて、西南学院がこの地にしっかり根付いていることを確認させられた。

午後の最初のプログラムは 2 時に始まり、2 時間 15 分に及ぶ充実したものとなった——「安部正義のオラトリオ《ヨブ》」をめぐって、と題するシンポジウムであり、4 人のシンポジストが充実した報告を行い、最後に質疑応答を行った。ちなみにこのプログラムは、3 月末のニューズレターで初めて明らかになったものの、説明は一切なく、当日まで内容はまったく不明であった。

まず手代木俊一氏が、「安部正義の生涯 作品を中心に」と題して、台本と作曲を担当した安部(明治 24 年生、昭和 49 年没)の歩みと業績、そしてこの作品の演奏歴を紹介した。特に、故園部順夫^{すなお}氏の自宅でオープンリールテープの中から初演時の録音が発見されたいきさつは感動的であった。

次に西南学院大学名誉教授で旧約学の専門家である小林洋一氏が、開口一番「私はヨブです」と、主人公による独白の形をとってヨブ自身の体験を語った。会場は一気にこの作品の世界に引き込まれる。

当日は、明治学院歴史資料館の編纂による 240 頁近い資料が販売された。詳細な作品解説の他に台本、全曲のピアノ・スコア、1967 年全曲初演時の録音 CD 2 枚組の付いた豪華版で 2000 円——明治学院側の多大なる貢献に、心から感謝する次第である。

次に、当資料集編纂の中心となった明治学院歴史資料館研究調査員加藤拓未氏が、この作品の資料について詳しい報告を行い、氏の専門である 18、9 世紀のドイツ語オラトリオと礼拝の関係、さらに安部の作品と

の比較を行った。この資料集をまとめるに当たって、氏がどれほどの時間を割かれたかと想像するだけで、頭が下がる思いである。

最後に、午前中オルガンを弾いて下さった西南学院大学音楽主事安積道也氏が再登場し、楽曲分析のあと、礼拝におけるこの作品の使用案を提案した。説教を中心に組み合わせる場合(4 種類)、音楽礼拝での抜粋演奏、各楽章を単独で使用する場合(4 種類)、そして葬儀礼拝の場合である。説明の中で当資料集の譜例が具体的に引用され、録音が会場に幾度も流れた。「エホバ与え、エホバ取り給う」の大合唱が響き渡る頃、参加者は皆、35 年前の世界に浸っていた。

手代木氏の司会による質疑応答では、ヘンゼラー氏が「日本人の手による最初のオラトリオ」という表現に対して当作品の作曲年を確認し、山本直忠が 1950 年に発表したオラトリオ形式の作品『受難』を紹介。加藤氏は、安部が留学中の米国で流行っていた英国の作曲家パリーのオラトリオやメンデルスゾーンの《エリヤ》などの影響に言及。他に、1930 年代の日本ではバッハの受難曲の公演が相次いでいたが、その影響を指摘する質問もあり、時間はすでに 4 時を回っていた。

2 分の休憩をはさんでフリートークである。新垣壬敏氏が古本屋で見つけた金子みすゞの詩集にキリスト教的な観点を見出し、10 曲からなる歌曲集を作曲。その中から 3 曲の簡素な旋律が女声合唱で披露され、《ヨブ》とは対照的な世界が会場に満ちた。午前、午後とも演奏で終わるといふ、誠に当学会に相応しいプログラムであった。

司会の伊東氏が、福岡での開催に当たって古澤前会長のご尽力に感謝し、金澤会長により〈閉会挨拶〉が行われた。1966 年に帰国して故園部順夫^{すなお}氏と親しくなり、《ヨブ》の第 1 回公演に誘われたが他に用事があり、1975 年の公演の際には米国にいて、今回やっと聞くことができた。今回は過去には思いつかないほど密度の濃い会であり、次々回は北海道でやっては、と締めくくったのは 4 時 40 分。

5 時からは正門近くの居酒屋「じゃがいも」に場を移して打ち上げ・その 1 が行われたが、座敷には足踏み式のオルガンが鎮座し、北海道開催の件も含めて、座は大いに盛り上がった。

(当学会会員)



▲総会風景：
手代木、金澤、
伊東の各氏



▲加藤拓未氏



▲オルガンの説明をする安積氏



▲古澤前会長



▲古澤前会長、司会の伊東氏

▲西南学院の辻オルガン

★テーマ 礼拝における創作と実践

★日時 2012年5月26日(土) 10:00-16:30

★会場 西南学院 チャペル

★プログラム

9:30 -	受付	総合司会	伊東辰彦
10:00 - 10:05	開会挨拶	会長	金澤正剛
10:05 - 10:10	挨拶	前会長	古澤嘉生
10:10 - 10:35	研究発表「礼拝における創作と実践ーカトリックにおける典礼音楽とオルガン」		林隆一郎
10:35 - 10:45	質疑応答		
10:45 - 11:00	休憩		
11:00 - 12:00	「礼拝における讃美と音楽」 オルガン演奏	前会長	古澤嘉生 安積道也
12:00 - 12:30	総会		
12:30 - 14:00	昼食、懇親会、自由行動		
14:00 - 15:30	シンポジウム「阿部正義のオラトリオ『ヨブ』」をめぐって		
			西南学院大学名誉教授 小林洋一氏(旧約学) 加藤拓未、安積道也、手代木俊一
15:30 - 15:45	休憩		
15:45 - 16:30	フリートーク 金子みすゞについて		新垣壬敏、女声合唱団
16:30	会長閉会挨拶		金澤正剛



★2011年度総会報告

第1号議案 2011年度事業報告および2011年度収支決算の件

第2号議案 2012年度事業計画および2012年度収支予算案の件

第1号議案、第2号議案いずれも、挙手による採決により、賛成多数で承認。

★役員会報告

①日 時：2012年5月12日(日) 14:00 - 16:00

場 所：立教大学セントポール会館

出席者：赤井、新垣、伊東、植木、金澤、佐々木、手代木、ヘンゼラー

議 題：・第12回大会の詳細な打ち合わせ
・学会誌、ニュースレター

②日 時：2012年8月4日(日) 14:00 - 15:30

場 所：明治学院記念館大会議室2F

出席者：赤井、新垣、伊東、植木、佐々木、塩谷、手代木、ヘンゼラー

議 題：・第12回大会報告
・第13回大会のテーマ等
・ニュースレター、学会誌
・学会誌第1-11号の在庫・保管について

③日 時：2012年9月30日(日) 14:00 - 15:00

場 所：S. Jハウス 1F

出席者：赤井、新垣、伊東、植木、金澤、手代木、ヘンゼラー

議 題：・第12回大会報告
・第13回大会案

★学会誌発行予定

第12号 学会誌……4月半ば発行予定

内容・巻頭言…赤井 励

・論 文…手代木俊一、鈴木治、植木紀夫

・書 評…2本(予定)

・研究ノート…新垣壬敏

・第12回大会プログラム・報告…伊東辰彦

★第13回大会予定

日 時：2013年5月25日(土)

会 場：国際基督教大学本館402号室、礼拝堂

テーマ：「礼拝におけるオルガンの意義」(仮題)

※第13回大会における研究発表会を公募いたします。

発表希望の方は事務局まで。

★会員出版物の案内・募集

佐々木しのぶ・佐々木悠著

『キリスト教音楽への招待』教文館 2012年5月

※編集委員会より

会員の最新刊行物を掲載し、皆様にご紹介したいと思えます。編集委員(手代木、佐々木宛)までお知らせください。

★会費納入のお願い

会の運営に対して、いつも支援をいただき感謝申し上げます。2012年度の会費をまだ納入されていない方は、ぜひ下記の口座にお振込みくださいますようお願い申し上げます。

郵便振替口座の名称が、『キリスト教礼拝音楽学会』と変更になりました。新しい振替口座への振込用紙をお送りいたします。口座番号は変わりませんので、今までの用紙の「東北地区部会」を二重線で消してご使用下っても構いません。どうぞよろしく願いいたします。

キリスト教礼拝音楽学会

郵便振替口座 02240-3-46335

入会金：3,000円(入会時のみ)

年会費：正 会 員 6,000円

準 会 員 3,000円

賛助会員 20,000円

●・振込用紙には*____年度/正・準・賛助会員/会費____を必ず明記の上、ご送金ください。

●住所変更等も、ぜひお知らせください。

●会費納入についてご不明なことがございましたら、下記にご連絡をお願い申し上げます。

会計担当 佐々木しのぶ

〒980-0023 仙台市青葉区北目町6-6-1401

(部屋番号が1101から1401に変更になりました。)

TEL/FAX 022-262-6565

Email:sshinobuorg@ybb.ne.jp